



Title	生涯現役の生き方から学ぶ：島尾忠男先生を偲ぶ
Author(s)	石川, 信克
Citation	目で見えるWHO. 2022, 80, p. 30-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

生涯現役の生き方から学ぶ —島尾忠男先生を偲ぶ—



公益財団法人結核予防会代表理事

石川 信克

東大医学部卒後、ネパールでの活動経験より国際協力を志し、結核研究所に入職。島尾先生より指導を受ける。日本キリスト教海外医療協力会派遣医としてバングラデシュで医療協力に従事（1978-86）。結核研究所国際協力部長、副所長、所長を経て2017年より同名誉所長。

国際保健のレジェンドであった島尾忠男先生が2021年3月28日、96歳の生涯を閉じられました。先生は日本ばかりでなく世界の公衆衛生に貢献された逸材で、世界中から先生の死を悼む声が寄せられました。若くして結核を病んで苦しみを味わった末、新しい結核薬のお蔭で回復されました。遅れた勉強をカバーするため、統計学や語学を独学で学び、その知識を生かして、結核疫学のパイオニア、国際協力の推進者になられました。結核研究所を通して、国内では、研究の傍ら、日本全国の医師や保健師、世界各地の医療従事者の人材育成にも尽力され、2000名を超える世界中の方々から尊敬も得られていました。一方、国際協力事業団（JICA）、世界結核予防連合（Union）、WHO等を通して、世界の結核対策のために貢献され、まさに、結核と共に歩まれた人生でした。定年後は、結核という各論を掘り下げて、国際保健、喫煙と健康、エイズ対策など幅広い分野でも活躍されました。喜寿を迎えられ「結核と歩んで五十年（結核予防会、2003年）」を著されましたが、それから20年、90歳を過ぎても最後まで現役で活躍され、外来診療も続けられました。自らの結核では、医学部を卒業された戦後の混乱期に発病、当時の治療の主流は安静・栄養の自然療法で、三年近くの入院療養生活を余儀なくされました。最初の抗結核薬はパスのみで、人工気胸療法など数回受けました。悪化が続き、胸郭成形術で右の肋骨八本を切除、局所麻酔のため痛みは尋常でなかったといえます。排菌が止まらず、翌年肺切除術を受けましたが、

当時手術を受けた十人に一人は術後の感染等で亡くなっています。いつも死の恐怖の中で、不安と悩みを味わっていたそうです。その後ヒドラジッドも併用され、排菌が陰性化し、治癒に至りました。この苦しみを乗り越えられたのは、生来の負けん気と高校時代に柔道で鍛えた体力のお蔭と本人は言います。そして生涯を結核疫学の研究と診療に捧げることを決意されました。回復後、1955年スウェーデン留学により、国際的な視野を養われ、結核医療だけでなく、広く公衆衛生や福祉も学ばれました。3カ月にわたる帰国船滞在中には、スウェーデン語から「呼吸機能訓練法」の翻訳をされ、手術後の機能訓練という新しい考え方を日本に紹介されました。結核という負の運命を、努力と根性をもってプラスに変えることが、先生の生き方でした。謙虚な人柄とともに、卓越した語学力、会話力のゆえに、結核分野だけでなく、当時未熟であった日本の国際保健医療協力の広い分野で、パイオニアのお一人として活躍されました。日本の国際保健医療学会の創設にも関わり、理事長として、学問的な裏付けに基づく国際保健の発展や若い人材の育成に寄与されました。

1988年、WHOの事務局長に中嶋宏氏が、また結核課長に古知新氏が就任した時、先生は執行理事として陰の立役者でした。両名のコンビで、世界的結核戦略DOTSが開発され、世界の結核対策が飛躍的発展を遂げたのも先生の陰の力があったからです。医師、研究者、国際人、教育者として先生の優れた才覚と実績は真似をすることはできません。しか

島尾忠男先生略歴

1948年東京大学医学部卒。1949年結核予防会入職。1955-56年スウェーデンに留学。1957年結核研究所集団検診科長、研究部長、副所長を経て、1975-84年結核研究所所長、1990-94年結核予防会理事長、2000年同会顧問、2016年より同会名誉顧問。この間、厚生省公衆衛生審議会委員、国際協力事業団海外医療協力委員会委員長、日米医学協力委員会委員長、国際結核肺疾患予防連合理事会議長、世界保健機関（WHO）執行理事、エイズ予防財団理事長・会長などを歴任。また第10回アジア太平洋たばこ対策会議会長（2010）、日本国際保健医療学会理事長を歴任した。

受賞歴：外務大臣賞（1982）、WHOヘルス・フォア・オールメダル（結核対策）（1988）、同（喫煙対策）（1999）、勲二等旭日重光章（1996）、山上の光賞、武見賞（2016）、WHOワールド禁煙デーメダル（2017）、ネパール政府結核支援功労賞（2021）等。



島尾忠男先生（結核予防会提供）



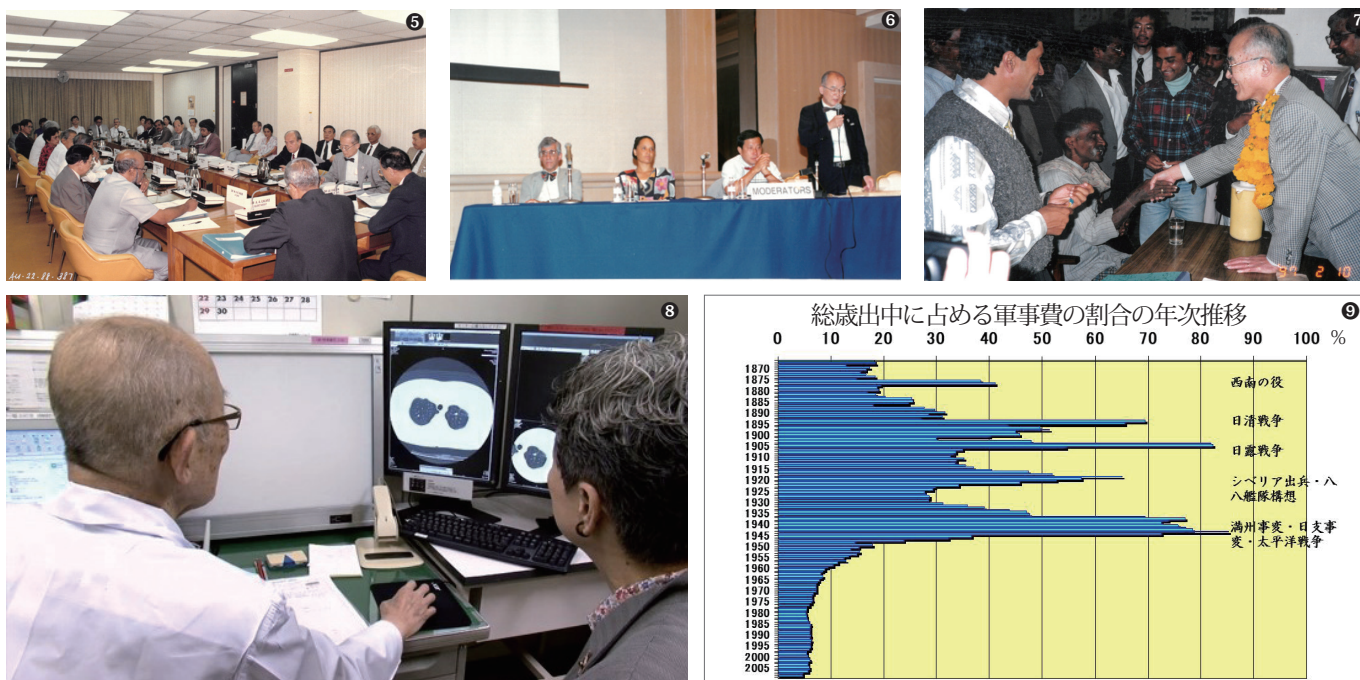
①3年間の療養中の様子（数学や語学に勤しんだ。） ②スウェーデン留学中より蝶ネクタイを好む。 ③1963年国際結核研修生への結核集団検診の講義。 ④1971年WHO/WPRO結核会議（韓国）。（写真はすべて結核予防会提供）

し学ぶべきは、90歳を越えた高齢になっても続けられた生き方です。自ら体験して来た対策の歴史に基づく論考を学会誌に投稿し続けられました。右肺が殆ど機能しない低肺機能、心筋梗塞の既往がある身体で、歩行もゆっくりでしたが、多くの会議に出席され、学会でも最前席に座られ、一言コメントを述べられました。また患者の痛みを知る医師として、患者と向き合うことを止められず、他の医師が避ける土曜日も、外来を担当し、平日に仕事を休めない外国人患者から喜ばれました。

明治維新以降の富国強兵策の中で日本の結核の高蔓延が続いた一因は、繰り返す戦争と軍事費に莫大な予算を使い過ぎ、民生費が削られたことによると、戦争も結核医療も肌で体験された先生ならではの主張です。また日本の皆保険制度（UHC）の発展の陰には、独自の予算をもって果たしてきた結核対策があったこと、結核予算で国民病であった結核を減らせたお陰で、全体の医療費への負担が無くなり、皆保険が可能になったというのも、地域の結核医療のフィールド経験に基づく指摘です。身体的にどんなに弱

っても、痛みを忘れず患者（人々）に接し続け、社会的な発信を続けた「根性」から、多くを学びたいと思います。

先生が遺された学会への投稿としては、「島尾忠男：60年の結核研究歴を振り返って一回顧と将来への展望一、結核87-10, 669-679, 2012.」、若い方々へのメッセージとしては、「日本の生きる道は、国際協調以外にない。南北間の健康問題にみられる格差の是正は、ひどい状態を経験した日本の大切な役割で、若い世代の活躍に期待したい。」があります。



⑤1988年WHO/WPRO結核会議マニラ ⑥1994年国際エイズ会議横浜 シンポジウム エイズと結核（会議録より） ⑦1997年プロジェクトでネパール結核患者との面談 ⑧90歳過ぎてでも患者さんの診療を続ける（⑤⑦⑧ 写真結核予防会提供） ⑨島尾忠男講義録より